



モンク先生との別れ

北星学園創立百周年記念館

矢島 あづさ

赤い球事件の目撃者

昨年、旭川から二度来館された卒業生がいます。北星女学校51回生（1939年入）1944年卒の櫻庭（旧・小出）静子さんは、モンク先生から3年間直接英語を学んだ最後の世代です。日中戦争が始まり、日本を批判する米国と関係の深いキリスト教主義学校は、世間から「ヤソの勉強をしてけしからん」と非難されることも多く、国をあげて戦時体制へと突き進む時代でした。



2020年7月に来館した櫻庭さん(中央)

櫻庭さんは、入学年12月に起きた「赤い球事件」の目撃者でもあります。事件の発端は、内務省防空局からの「某日、赤い球を校内に落とすので、爆弾と思って防火訓練をせよ」という一本の電話でした。

連絡ミスのため、訓練と知らない生徒たちは校庭に落ちてきた赤い球を蹴って遊びだしました。指示を受けて寄宿生は消火訓練を始めましたが、他の生徒は校舎の窓から珍しそうに眺めているだけ。そのように、視察に来ていた防空局や警防団の担当者は激怒しました。「生徒全員が校庭に並ばされ、新島校長先生が倒れてしまうほど、ひどく叱られたのを覚えています」と櫻庭さん。この事件を

機に「非国民」のレッテルを貼られた北星は、厳しい行政指導を受けるようになったそうです。



晩年のモンク先生

この写真の中に私がいる

当館には、太平洋戦争が始まる直前、米国人宣教師との別れを惜しみ、1941年9月に撮影した集合写真が展示されています。

戦時中のため、櫻庭さんには卒業アルバムがありません。以前にも何度か来館されていますが、その度に、この写真を感じ深げに見つめます。

「私は溝上校長先生の真後ろ、三番目にいます。これは聖書の先生、家庭科の先生、音楽の先生は普段の話し声もきれいでした。この娘は室蘭から来た寄宿生」と、その記憶力には驚かされます。櫻庭さんによると、右側三分の一ほどは新入生で、セーラー

服に憧れて入学したのに、へちま襟の国民服しか着られなかったそうです。



データ画像を拡大して確認する櫻庭さん

最後のサインはハンカチに

現在、櫻庭さんは介護施設に入居されており、コロナ禍のため来札の許可はなかなか出ませんでした。「ここに来て女学生時代の話をするのが母の生きがいなので、何とか叶えたかった」と、ご子息の満さん。

そんな状況でありながら、身分証明書、卒業証書、授業料校費納付袋、校章、市電通学券など女学生時代の品々を寄贈するために、再度訪問してくださいました。1940年発行の「北星特報」は、現在の学園報のようなものでしょうか。帰

国したスミス先生の近況も書かれ、離れても北星のことをどれほど考えていたか伝わってきます。

いずれも貴重な史料ですが、中でも目を引いたのはモンク先生のサイン入りハンカチでした。



モンク先生のサイン入りハンカチ

「モンク先生が帰国のため宣教師館を出るとき、クラスメートの山口尚子さんと一緒にハンカチを用意し、この玄関先でお別れの記念にサインをお願いしました。先生は手の上で書かれたので、ファーストネームのスペルが少しにじんでいます。初めて聞くエピソードに、思わず、手が震えてしまいました。また一つ、北星の宝物が増えました。



宣教師との送別記念に全校生徒・教職員と一緒に撮影